

よつて更に改信は確固たるものになつたのである。

即ち疎勒、莎車、干闥国に於いて大乘が發展しつゝあつたその波及が羅什をまたずしてすでにこの国にも入つていたのである。

従つてこの様なことから考えると羅什がカシミールに渡らねばならなかつた理由は母尼の政治的理由のため亀茲をはなれ時期を待つ必要があつたのである。

少なくとも羅什時代のこの国の仏教は説一切有部が幾分勢力を持っていたが、国内の大乘教の發展を認めざるを得ず大乘小乗が互いに共存していた時代である。更に大乘を確固たるものにしたのは王白純が大乘学者を新寺に集め援助していたことである。

しかしこの様な共存時代がその後ずつと続いたかについては疑問である。唐代になつて玄奘が見た亀茲はやはり小乗有部であり大乘に関する記事が見当らない。又大唐大慈恩寺三蔵法師伝に、玄奘が屈支（亀茲）の阿奢理界寺に於いて木叉毘多との会話があるが、それによると、此土維心俱舍毘婆沙等一切皆有。学之足得不煩西涉受

艱辛也。法師報曰此有瑜伽論不。毘多曰何用問是邪見書乎。真仏弟子者不学是也。（大正藏50・226・c）とあつて完全な小乗教である。

このように玄奘が見た亀茲国は小乗であつて大乘の記事がないことから、鳩摩羅什が呂光によつて中国に連れ去られて以後、大乘はこの国から姿を消したのではなからうか。即ち帛純王の新寺に大乘学者が羅什とともに竜樹系の般若空思想を学んでいたのであるが、同時に帛純が呂光によつて征伐され亀茲国が衰運に向つていた事実から次第に大乘は姿を消したのであつて亀茲国はその后大乘化されてしまつたと断言できないのである。

往生論の名称について

長 田 淨 濟

往生論はくわしくは「無量寿経優波提舍願生偈」という。今はこの「無量寿経優波提舍願生偈」を分解してそ

の一々について少し論じていくつもりである。まず無量寿とは、無量寿如来は寿命が無量であり、我々凡夫の分別によつて思量出来ないから無量寿といい、經というのは釈尊のとかれた教をいい安樂国土の三種莊嚴功德は一切衆生の為に常に世に行われ、衆生をして豊かにするから經といわれる。次に優波提舍について記すと、世親の著書の中には今こゝでいう「無量寿經優波提舍願生偈」のほかに優波提舍と名のつくものは次の四つである。即ち妙法蓮華經優波提舍、宝髻經四法優波提舍、三具足經優波提舍、転法輪經優波提舍である。今これら優波提舍について原語的に解釈すると Macdonell のサンスクリット辞典によれば upa とは hither (こちら) 、near (近く、接近して) 、approximation (接近) という意味がある。desya とは to be pointed to (教える) 、point out (指し示す) とあり、又語源 dis は point out (指し示す) 、show (教える) 、produce (示す) 等の意味が含まれている。又 Monier の辞典によると upa とは

near to とあり、upa-desa とは pointing out to とある。結局 upadesa とは「近くよりくわしく説き示す」という意味内容ではないかと思われる。今そういう内容のもとに upadesa が使われている二、三の經論をあげると、まず、利他賢造の大乗莊嚴經論に莊嚴經論がつくらねばならない造論の意趣を述べる次のような言葉がある。即ち「世尊釈迦牟尼が有情を心攝受する事に関して法輪を転じ給うは誰に向つて何の為に、如何様に、誰に依て学ばるべきかの四義を意趣して極めて甚深なる義を有する無量の經を説き給うに在り。長時に修習せし福智にて有情を成熟せんと意趣を具し給うに依りて在世の砌り親近せるものに対しては清淨の因性によりて意樂の如く利益をなし給いしも涅槃し給うや。我等如きの所化の有情が攝受せられん為に無量の經を久しく住せしめんとて結集者は茲に無量の經を結集したるなり。然るに五濁時の毘舍遮の為に有情の資糧心無くなる時、彼無量の經の義は了解し難き故に、彼經の義を易く了解せしめん為に、聖無者をして論師世親に向いて

一切有情が随順せられん爲に、彼經の義を説示する此莊嚴經論を世尊弥勒は説かしめたり」とあり莊嚴經論を説示した即ち upadesa したのである。この莊嚴經論のことが一つの優波提舍としてあつかわれているが、その文章の最後に書いてあるように、人々の經典に対する理解力がなくなつて經典の意味内容が了解しにくくなつた時にその經典を理解しやすいように一切の人々に説示すると述べているのでそれは經典の意味を一切の人々が了解出来るように、その經典の意味内容に近く、經典をよりくわしく説くという意味であると思われる。又世親の釈軌論の中にも造論の意趣を述べて次の如くいっている。「智慧ある人々のかしらに立ち「染汚と不染汚との」二の痴暗の眠りを滅する爲に、また智慧が増広するために覺証した牟尼に、頭をもつて稽首礼して、若し人の智慧は主より劣つていて、ただ諸經を解釈しようと欲うそれらの人々にその〔經を解釈すること〕に有利になるために、幾許かの優婆提舍 (upadesa) を説かねばならぬ」とあり、こゝにも優波提舍という言葉がつかかわれ

ている。釈軌論のことをくわしくは (Sūtra-vyākhyā-yukti-upadesa) 「經を解釈する軌法の指示」であると山口益博士も「世親の釈軌論について」という論文の中で述べておられる。目下の無量寿經優波提舍は、結局無量寿經の意味をわかりやすく (upadesa) していることがその本領であり、瑜伽唯識思想がその時代の人々の思想的な素地であるならば、その素地によつて無量寿經の意味をその時代の人々にわかりやすいように (upadesa) 無量寿經に近くよりくわしく説き示していくと言うことが往生論の本領ではないかと思われる。瑜伽唯識時代には瑜伽唯識的に浄土を説明すればいいわけであり、瑜伽唯識時代も瑜伽唯識の思想家であつた世親が、彼の教学の立場で瑜伽唯識の思想を素材にして浄土の教を讃仰し、それを当時の人々に (upadesa) したのだと思われる。以上は大乗莊嚴經論が (upadesa) であることの意味と釈軌論が (upadesa) やあることの意味を、それぞれ莊嚴經論と釈軌論の注釈書によつて調べたのであるが、この他にも (upadesa)

がそういう意味で用いられている例が見出される。即ち月称の中論釈の四諦品の中の言葉で次のように述べている。

「如来の教法は、人がその法と相應して実践することによつて、物のあるべき姿である縁起法を覚証することになり、それによつて仏陀となるという道理が成立つ。また如来の教法を伝持する教団のあるときは、その教団によつて教法はその時代時代の人々に近接して示され（*upadeśa*）それらの人々の上に福智の資糧が用意せられて成仏の道がきわめられてゆく」といつている。大乘莊嚴經論と釈軌論は瑜伽唯識の論書において（*upadeśa*）の言葉が用いられたのであるが、今の中論釈は般若中観の論書における用いられ方であるけれども、この二つの学派の性格とは關係なしに（*upadeśa*）の言葉は常にそのように用いられていたようである。以上の言葉の意味をその言葉が実際に用いられている用例にしたがつていくと、そういう意味が含まれているのがわかるのである。（*upadeśa*）が、そういう意味を包括

している点から考察する時に無量寿經優婆塞の意味が又そのように理解されてもいいのではないであらうか。というのは、浄土教的思想とは大乘仏教の実践的体系の上でいうように大乘の菩薩道が究められていく位態に於て成就されていくのであり、その浄土思想が今往生論において説き示され、即ち（*upadeśa*）せられるのであるから往生論は宗派的に考えられた浄土教の論書であるというのではなくして大乘の仏道が展開してゆく究極的な位態に於ける成仏思想が特に取上げられて（*upadeśa*）せられるという目的の書物であるということではなければならないと思われる。又曇鸞は論註の中で次のように述べている。「優婆塞とは十二部經の中の論義經のことをさしていい論義と訳す。これもと仏説教の一形式に名づくる名目なれども仏弟子の經教を解するに仏教と相應するもの亦た優婆塞と名づけた」とあり、つまり諸々の仏弟子が、仏の經教を解釈してその解釈が仏の教の義と相應しておれば、仏はその解釈をも許して（*upadeśa*）と名付けられるというのである。以上で

優波提舍の語義についてその検討を終わりたいと思う。こゝでは前述したように無量寿經優波提舍は無量寿經の本来の意味、本当の教えに近く、そして人々にわかりやすく説き示す為に世親がそういう題目にしたのではないであらうか。次に願生偈とは、世親自らが彼の安樂國に往生したいと願求することを述べた偈頌の意味である。

仏教における、いわゆる神觀念について

小 野 泰 昭

宗教のいづれを問わず、聖觀念をとり除いて、それらの存在はあり得ない。

「聖」とは、やゝもすれば神秘のヴェールが被せられ、ことさらに、我々にとつて不可知の怖れ多いものであるとの一般的解釈がなされ、その結果、宗教の本来の姿についての誤解を導いているようであるが、決してその様なものでなく、聖とは奇跡、奇瑞、不思議の形容ではな

くて、宗教的実践の結果、導きだされる実践者の獲得する智慧の形容であり、その尊さの総称でなくてはならないし、それによつて人々が日々に新しい生命を、身のうちに附与されるものでなくてはなるまい。

聖への觀念は「神」という語によつて述べられているのが普通であり、仏教の場合においては、それが「仏」なる語によつて表わされているのは周知のことである。

キリスト教は、一言に言えば、神中心の宗教であり、神への追求がその学のすべてをなしていることは、キリスト教学が神学と同一内容をもつことからしても明らかなどころであり、西洋における宗教学が比較宗教学に至る前提の間、神への考察にそのすべてがあつたとしても間違ひはない。

仏陀は無師独悟の人であつたし、キリストは、あくまでも神の使徒であつたという両宗教成立の基盤の相違は、それぞれに独自の性格を与えたようである。

仏教の成立は歴史的事実の人によつて、唯一人の師もなく、天啓も与えられずして、なされたわけである。当